誌上行学講習会

高佐日煌上人

離中知とは、離れてものを知覚すること。眼は離れてものを考察します。眼は光線の結びによるのですから、あまり近づけるとみえない。ある程度離れてみる。そして知る。これを離中知と言うのであります。耳もそうで、音は空気の振動ですからこれも多少はなして聞かねばなりません。

合中知とは逆にぴたりと合わせて知ることで、舌等はまさにそうでありましょう。まんじゅうを離れて見ていて「どうだうまいだろう」と言ったところで解らない。これは口の中に入れて舌にのせて味覚しなければ解らない。身体の方も、かたい、やわらかい、あつい、冷たい、というのはさわってみなければ解らない。このことを合中知と言う。鼻はその離中知と合中知の中間で、かすかな臭いは鼻をくっつけなければ解らない。ここまではよいが、さて眼を一に耳を二にする理由は何であろうか。ここに俱舎の五根所依の上下説が出てくるのであります。これは人間の顔を見るとその上下は、第一番目が眼、二番目が耳、三番目が鼻、四番目が舌、ここまでは解ります。ところが次の身ということになるといささか問題が残るような気がいたします。そこで八整識観Ｖにおいてはもう少し具体的に正確に合理的に見つめたいのであります。

「二、整識観に於ては、眼、耳、鼻、舌、身の配例を、生命運営感覚の浅深の次第に依る。生命運営の感覚は、生存と生殖の二大目的に集約せられている。」

我々はこの五官の配列を事実にあてはめて考えて見るのであります。そうすると、生命（いのち）を営むためのものであることに気がつきます。この生命（いのち）の営みの究極は、生存と生殖の二つになります。生きるということ、子孫をつくるということ。これが生命の大きな目的であります。

「眼は色形の知覚であつて最も広くして最も浅く、耳は音声の知覚であつて眼よりも遥かに狭く感覚に於ては稍深きに触れる。鼻は香臭の知覚であつて、生存と生殖の官能を調節する。」

皆さんはサイレント映画を御存知でしょう。音の出ない映画のことでありますが、あれに擬音を入れたり、弁士の説明を入れなかったらつまらないでありましょう。耳は範囲はせまいが眼よりも深いところを知ります。テレビは眼、ラヂオは耳であります。しかし見るだけでは未だ浅い、耳で聞くというところに深さが出る。次に鼻。鼻は香臭の知覚です。ずい分世の中に臭がありますが大別すれば二つ乃至四つであります。食欲をそそる臭と、性欲をそそる臭で、㈠食欲をそそる臭い。例えば牛肉をやくとかうなぎをやくとかの臭い。㈡食欲を減退する臭い。例えば腐敗した臭いくさった臭い㈢性欲をそそる臭い。お化粧の臭い香水の臭い。これらの最たるものが蛇香であります。㈣性欲を減退させる臭い。お寺でつかう香木香り良いお線香等はそれであります。お寺へ来て仏様を前にして興奮しては困ります。自然に心を沈めるために香をたくわけであります。茶室の存在もその為と言えましょう。自然に心の欲望をおさえるのであります。そういうわけで、鼻は生存（生命）と性殖（性欲）を調節する役目を持っているわけであります。

（以下次号）